

古代出雲歴史博物館 授業に役立つ資料解説集

東京書籍『新しい社会 6 歴史編』準拠

この資料解説集では、小学6年生の社会科（東京書籍『新しい社会 6 歴史編』）に関連した資料を紹介、解説しています。いずれも、古代出雲歴史博物館で展示している、あるいは収蔵している資料です。

はじめて歴史にふれる子どもたちに、すこしでも歴史に親しみをもってもらいたいとの思いから作成しました。島根県にゆかりのある資料を、授業の導入などで触れていただけたら幸いです。

また、古代出雲歴史博物館ではこれらの資料を見学できるほか、一部の資料ではレプリカに触ったり体験したりできるメニューをご用意しています。古代出雲歴史博物館へのご来館お待ちしております。



1 縄文のむらから古墳のくにへ

大昔のむらのくらし

教科書 p 8～9



この図は、島根県の縄文時代の遺跡を想像したものです。
p 12・13にある、三内丸山遺跡のくらしをあらわした図を観察し、
この図と比較してみると発見があるかもしれません。

資料解説（島根県の縄文時代の集落・想像図）

島根県では、中海・宍道湖や海の岸辺、川沿いの平坦な場所を選んで集落が営まれました。斐伊川や神戸川のような大きな川では、川沿いの平坦地ごとに小さな集落が作られました。東日本の集落は三内丸山遺跡のように大規模ですが、島根県では各地に小規模の集落が分散していたようです。



p 9の縄文土器と同じように、煮炊きで使用された縄文土器を展示しています。

資料解説

（島根県の縄文土器・約5500年前）

島根県など、西日本の縄文土器は、東日本の土器ほどには模様がつけられていません。この土器は、表面に縄文がつけられ、口の部分にさらに模様がつけられています。



資料解説（狩りのようす・想像図）

縄文時代の人々は、動物や魚、貝などを捕り、木の実や球根などの植物を採集して食料としていました。

狩りは、弓矢のほか、落とし穴やわなをしかけて行っていたと考えられています。



見開き p 12・13で作っている石器の本物を展示しています。

資料解説（やり）

道具は石や木、骨を使って作られました。

隠岐島の黒曜石は、加工しやすく、鋭い刃ができるので、矢じりやナイフなどによく使われました。写真のうち、大きな黒曜石は雲南市から出土しました。石器の原料として、遠くまで運ばれたことがわかります。

小さな石器は、黒曜石で作られた弓矢の矢じりです。

《申込みがあれば本物に触れます》

1 縄文のむらから古墳のくにへ

板付遺跡と米づくり

教科書 p 10～11



p 11にある木製くわも展示しています。
写真のスcoopは、なんと刃先が鉄製です。



p 11の石包丁や稲作で使った石の鎌も展示しています。

資料解説（木で作られた鍬・スコップ）

弥生時代に入り、稲作が伝わるると同時に鍬やスコップといった農具がつくられるようになりました。弥生時代前半の農具は、すべて木で作られていますが、後に刃先に鉄をつけるようになりました。

水田や水を引くための溝をつくるのに、スコップや鍬は欠かせません。島根県内の遺跡からは、このような木で作られた農具がたくさん出土しています。

《申込みがあればレプリカに触れます》

資料解説（収穫の道具・石包丁）

稲の収穫には、石包丁が使われました。稲の穂だけを刈り取っていたようです。鉄の鎌は、弥生時代の終わりになって、やっと登場します。

島根県の石包丁は他の地域より大型なのが特徴です。



資料解説（木と鉄の工具）

弥生時代になると、大陸から鉄が伝わってきました。鉄は斧の刃などに加工されて、木と組み合わせて使われました。斧は樹木の伐採に使われ、燃料としたり、建物の柱が作られました。

《申込みがあればレプリカに触れます》



p 11の弥生土器と同じころ島根で使われた本物の弥生土器を展示しています。

資料解説（弥生土器）

米作りの広がりとともに、全国へ弥生土器も広がっていきました。壺は貯蔵に、かめは煮炊きに、と形によって使い分けられたと考えられています。米は長期に貯蔵できることから、余った米が富として蓄えられました。

1 縄文のむらから古墳のくにへ

むらからくにへ

教科書 p 16～17



p 17

銅剣と言えば古代出雲歴史博物館！
全国最多、358本の銅剣（本物）を展
示しており、レプリカに触ることもできます。



資料解説

弥生時代に朝鮮半島から銅剣などの青銅器が伝わってきました。豊作を祈る
お祭りに使われたと考えられています。

荒神谷遺跡では、銅剣、銅鐸、銅矛の3種類の青銅器が出土しました。3種
類の青銅器が一か所から出土したのは、全国でも荒神谷遺跡だけです。また、銅
剣は358本出土しましたが、これだけ多くの銅剣が出土したのも、荒神谷遺跡だ
けです。

《申込みがあればレプリカに触れます》



p 17の銅鐸の説明に、
「島根県」と書かれています。
歴博にはこれらの小型の銅
鐸をはじめ、大型の銅鐸も
多数展示しています。
39個の加茂岩倉銅鐸
（本物）は必見です。教科
書ではわからないトンボな
どの文様も観察できます。



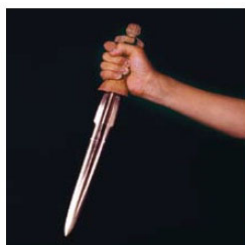
資料解説

加茂岩倉遺跡では、39個の銅鐸が出土しました。一か所ですごく多くの
銅鐸が出土したのは、全国でも加茂岩倉遺跡だけです。

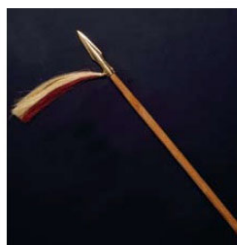
銅鐸も、豊作を祈る祭りに使われたと考えられていますが、吊り下げて釣鐘のよ
うに音を鳴らして使われました。自然にはない金属音が、当時の人々に神秘的に
聞こえたのかもしれません。

《申込みがあればレプリカに触れます》

《石膏銅鐸をつくる体験メニューがあります》



3
銅剣の
使用方法



1
銅矛の
使用方法



4
銅鐸の
使用方法



2
銅文の
使用方法

資料解説

銅剣は、手で握って振り回す剣（つるぎ）、銅矛は槍先です。本来は、武器
として使われましたが、日本に伝わってすぐにお祭りの道具に変わりました。

銅鐸は、吊り下げて、内側には棒をぶら下げて使ったと考えられています。この
棒が、銅鐸の内側当たって音を鳴らしました。銅鐸の内側には、棒が当たって磨滅
したあとがみられます。

青銅器は、現在は緑色をしています。作られた当初は金色をしていました。



p 19の卑弥呼の説明に書かれている
銅鏡（100枚）の内の1枚だと言われ
ている、全国でも大変珍しい三角縁神
獣鏡を展示しています。



資料解説

この鏡の一部には、「景初三年」の年号が描かれています。「景初三年」は西
暦239年にあたり、邪馬台国の女王・卑弥呼が中国に使者を送った年です。こ
の鏡は卑弥呼が中国から贈られた鏡のひとつかもしれません。

なお、「景初三年」と記された鏡は、全国で2つしか発見されていせん。

《申込みがあればレプリカに触れます》

1 縄文のむらから古墳のくにへ

巨大古墳と豪族、大和朝廷と国土の統一

教科書 p 20～21



p 18の仁徳天皇陵古墳（大仙古墳）と同じ古墳時代に
出雲の古墳に葬られた王の姿を復元しています。勾玉
や刀などをどのように身につけていたか
しっかり観察できます。



p 19に復元された石室の写真があります。
歴博では、出雲市内にある大きな古墳の断面を
模型でわかりやすく展示しています。

資料解説

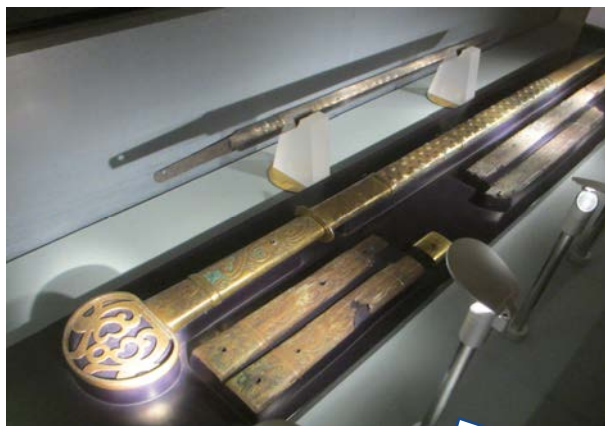
大きな古墳からは、豪華なものが出土することがあり、古墳に納められた人が大きな力を持っていたことがわかります。

写真は、出雲市築山古墳の出土品をもとに、この古墳に納められた人の姿を想像してみました。

頭には冠をかぶり、腰には大きな刀をさし、飾り金具をつけた馬にまたがっています。冠、大刀、馬の飾り金具などは、大和朝廷から贈られたものと考えられています。

資料解説

出雲市にある上塩冶築山古墳は、出雲西部を治めた人が埋葬されています。きれいに加工された石を積んで、大きな石の部屋が作られ、中には人の背丈ほどもある石の棺が置かれています。



p 20に古墳時代の鉄剣があります。
歴博では、さびていない古墳時代の本物の刀を間近で
観察できます。

資料解説（古墳に納められた刀）

古墳時代の刀は、さびつものが多いのですが、この刀はさびを落とすと、きれいな刀の輝きが現れました。古墳に葬られた人物が所有していたものでしょうか。古墳時代の刀で鉄の輝きを保っているのは、非常に珍しいことで、国の重要文化財に指定されています。



p 19に古墳の出土品があります。
勾玉や管玉は、弥生時代から島根県でも
生産されており、玉造温泉の名称はそこから
きています。

資料解説

松江市玉湯町では、勾玉や管玉など、多くの玉を生産していました。とくに古墳時代の後半には、出雲以外で玉が作られたところはありません。

玉湯町の花仙山からは、玉の原料となる「めのう」が産出したことから、この周辺で玉作りがさかんに行われました。

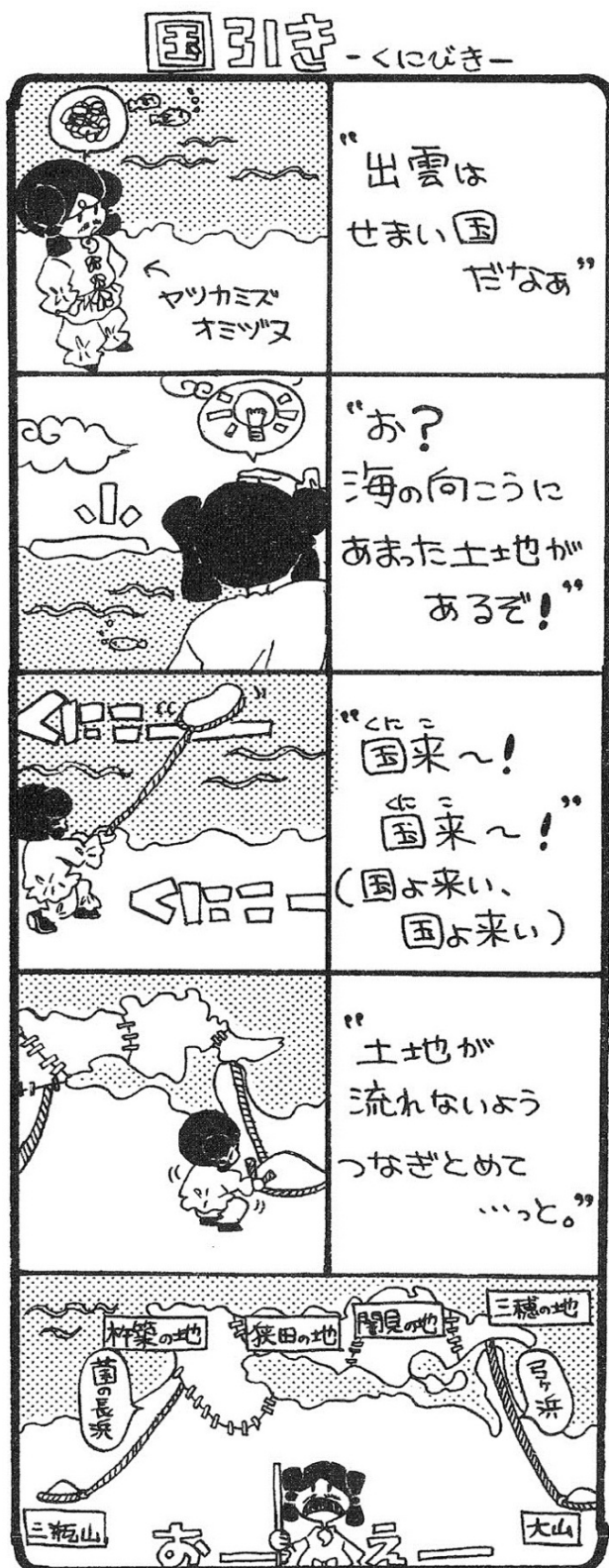
勾玉や管玉は、いくつもつなげてネックレスとして使われました。

《勾玉をつくる体験メニューがあります》

1 縄文のむらから古墳のくにへ

大和朝廷（大和政権）と国土の統一

教科書 p 21



歴博には、p 21の「神話に書かれた国の成り立ち」を、わかりやすい映像で見られるシアターがあります。

シアターでは、「風土記神話」「スサノヲ神話」「オオクニマシ神話」「中世のワロチ神話」の4作品を見ることができます。

左のマンガは、「風土記神話」に登場する「国引き」の物語です。この物語は、ほかの書物にはなく、『出雲国風土記』だけに書かれています。

展示室では、この国引き神話をプロジェクションマッピングによるダイナミックな映像で紹介しています。



大社町奉納山公園からの眺めです。「国引き」神話に登場する、綱に見立てられた園の長浜と、杭に見立てられた三瓶山を一望することができます。

古代出雲歴史博物館から徒歩15～20分です。

2 天皇中心の国づくり

大化の改新と天皇の力の広がり

教科書 p 26～27



風土記時代の出雲のようです。
歴博の展示室には拡大したパネルを展示しています。
住んでいる地域を探してみるのも楽しいです。

資料解説（出雲国風土記）

天皇を中心とした国づくりが完成したのち、国の産物、地名などを把握するため、『風土記』を作るよう全国に命令が出されました。

『出雲国風土記』は、その時作られた風土記の一つですが、内容がほぼ完全に伝えられているのは『出雲国風土記』だけです。

風土記には、地名や産物、地元の伝説など、たくさんの情報が盛り込まれています。

また、風土記に書かれている地名で、現在でも使われているものがたくさんあります。



p 27 の荷札と各地の産物です。教科書にも書かれている隠岐の産物である海藻が書かれた木簡の複製を展示しています。



資料解説（木簡）

木簡は、荷札の一種です。誰が送ったのか、荷物はなにか、いつ送ったのか、などが書かれています。租庸調の調として様々な品が都へ届けられました。

平城京から出土した木簡には、隠岐から運ばれた荷物が書かれています。これによると、隠岐から、イカ・アワビ・サザエ・ノリなどの海産物が運ばれていたことがわかります。

資料解説（近畿で作られ隠岐へ運ばれた土器）

隠岐からは、平城京で作られた土器が出土しています。

税を納めに行った人たちが持ち帰ったのでしょうか。平城京から遠く離れた隠岐でも、みやこととの交流があったことがわかります。

2 天皇中心の国づくり

仏教の力で国を治める

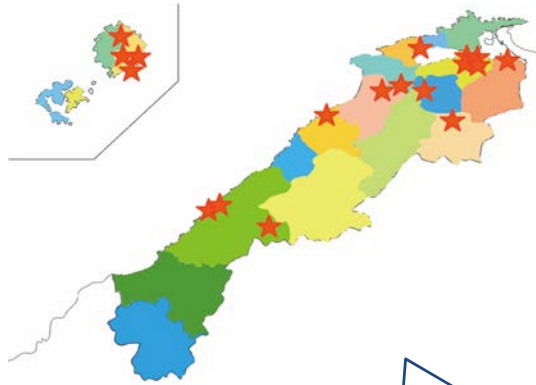
教科書 p 28～29



資料解説

日本に仏教が伝わってからしばらくして、島根県でも仏教寺院が作られるようになります。安来市教皇寺跡は7世紀後半に作られた寺院と考えられています。また、出雲市鯉淵寺には692年に作られた仏像が残されています。

奈良時代には、出雲・石見・隠岐の各国にそれぞれ仏教寺院がありました。この時代、島根県でも仏教が広まりました。



文献や発掘からわかった、島根県に建てられた奈良時代の寺院の場所を示しています。地図の色は、奈良時代の都を表しています。

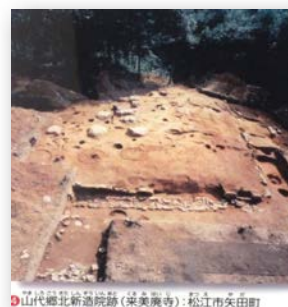


資料解説

古代には、瓦は仏教寺院にだけ使われました。当時の瓦は、丸い瓦と平坦な瓦を組み合わせ、軒先には模様のある瓦が使われました。

写真は、軒先に置かれた瓦です。

《申込みがあればレプリカに触れます》



資料解説

奈良時代には、地方の豪族たちも仏教寺院を建てました。『出雲国風土記』には、出雲国内に11箇所の寺院が豪族によって建てられたことが書かれています。松江市矢田町の来美廃寺（くるみはいじ）は、『日置君目烈』（へぎのみきめづら）という人が作った寺院です。地方の寺院で、建てた人の名前がわかり、じっさいに遺跡として寺跡が残っているのは、珍しいことです。

2 天皇中心の国づくり

大仏をつくる

教科書 p 30～31

大仏をつくろう

古代出雲歴史博物館では、出前授業のメニューとして「奈良の大仏 実物大パネルづくり」をご用意しています。
所要時間は45分程度です。みなさんの学校で、大仏パネルづくりに挑戦してみませんか。



※2020年9月現在 新型コロナウイルス感染症対策のため受付を中止しています

①組み立て開始

体育館をいっぱいに使って行います。
事前に、学芸員による大仏のレクチャーやクイズもあります。

②みんなで協力しあって大仏づくりに挑戦します



③だんだん大仏さまの姿がみえてきました。
完成までもう一息。

④完成！
楽しみながら、奈良の大仏について知識を深めるとともに、その大きさを肌で感じることもできる学習です。

2 天皇中心の国づくり

大陸の文化を学ぶ

教科書 p 32～33



資料解説（発見された文字）

8世紀の土器には、文字が書かれたものが増えるようになります。日本に漢字が伝わったのはもっと前ですが、このころに島根県でも漢字を書く人が多くなったようです。文字が書かれた土器は、役所跡や寺院跡から出土することが多く、役人や僧侶がおもに文字を使っていました。



資料解説（碁石）

島根県では、8世紀ころから碁石が出土するようになります。囲碁は、中国から朝鮮半島をへて、7世紀には日本に伝わってきたと考えられています。みやこから送り込まれた役人や、みやこに出かけた地元の豪族などが、島根に囲碁を持ってきたのでしょうか。



資料解説（衣服）

役人の服装は、当時の中国にならって、法律で決められていました。位によって服の色やベルトの飾りが違います。



資料解説（和同開珎）

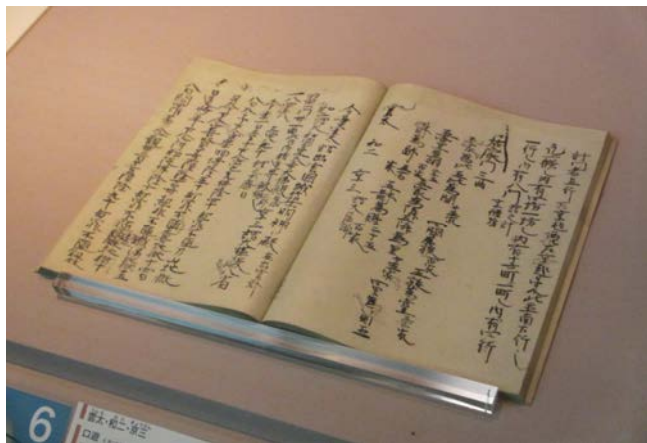
中国にならって、古代の日本で作られたお金が和同開珎です。みやこ周辺ではお金として流通しましたが、地方ではまだ物々交換が主流で、お金としてよりも力を示す「宝物」と考えられていたようです。

《和同開珎をつくる体験メニューがあります》

3 貴族のくらし

貴族のくらしから生まれた文化

教科書 p 38～39



資料解説（口遊・くずさみ）

平安時代の教科書には、出雲大社が全国で一番大きな建物と書かれています。二番目が東大寺の大仏殿、三番目が平安京の大極殿（天皇が儀式を行うところ）です。



資料解説（平安時代の出雲大社（推定））

写真は鎌倉時代の図面をもとに復元した1/10の模型です。実際の高さはわかりませんが、「口遊」の記事から、平安時代も非常に高い建物だったと考えられています。



資料解説（平安時代の大きな建物）

出雲大社・奈良の大仏殿・平安京大極殿を、同じ縮尺で比べてみました。鎌倉時代の絵図には出雲大社の高さが16丈（約48m）と記されており、奈良の大仏殿の高さ15丈（約45m）より高かったようです。